

# 無責任 三九号

ぎんいろの小鰭をのどであじわえば額はすすしい夏をまつてる

浮島

深き深海

清水らくは

薄暗い深海の底のさらにくぼんだ場所で  
眠っているような失神しているような  
そんな魚が一匹いた  
めったに動くことなどなく  
めったに見つかることなどなく  
しいんと静まり返った世界で  
時折静かに息を吐いた

実はその魚は寿司にするとうまいはずである  
これまでのどんな寿司よりも  
うまくなるはずである  
けれども誰も彼を知らない  
深海魚ですらほとんど知らない  
誰も味など想像もできない  
けれども彼は寿司になればうまいはずなのだ

何百万年と続くその魚の歴史の中で  
寿司の歴史は一瞬に等しい  
近くで深海を探查する船が  
大王イカを観察していた  
うまいのはそいつではないのに  
彼のことなど全く気にかけることもなく  
人類が減んでしまいう前に  
彼のことを見つけられたとして  
進化がなんだとか  
生熊がどうだとか  
そんなことより寿司にするべきだ  
しかしきつと彼は深き深海の底で  
眠っているような失神しているような  
そんな生涯を終えるのだ

無責任 三九号  
責任者 清水らくは  
副責任者 浮島  
発行日 二〇一五年五月一日  
発行元 無責任 zone